

〈書評〉

ピーター・シンガー著 児玉聡・石川涼子訳

『あなたが救える命』

——世界の貧困を終わらせるために今すぐできること』

(勁草書房 2014年 312頁 ISBN: 978-4-326-15430-2 2,500円+税)

板井 広明



本書は『動物の解放』（1975年）などで知られる功利主義者ピーター・シンガーが「飢饉、豊かさ、道徳」（1972年）以来、問い続けてきた「世界の貧困を終わらせるために今すぐできること」を論じたものである。国家の対外援助に期待するのではなく、困窮者に有効な援助を行なう団体への寄付で「あなたが救える命」は増え、貧困を無くすことができる——人々には寄付という自発的な所得の移転＝慈善行為の責務があること、その倫理的理由を示し実行を促すこと、人々の日常的な直観に挑戦する本書が書かれたのはこの故である。本書はまた功利主義に依拠しつつ、世界の多くの宗教的理念や伝統も同意すると思われる根拠から推奨される「寄付のススメ」でもある。

第1章「子どもを救う」では、世銀の貧困ライン、1日1.25ドル以下で暮らす14億人が絶対的貧困にある一方、世界の10億人は人類史上例を見ないほどの豊かな生活を享受しているという対照的なあり方と、目の前に溺れそうな子供がいれば皆助けるが、遠くの貧しい地域で子供が亡くなりかけていても助けようとしなないこととは不道徳ではないかと問う。

第2章「助けないのは間違ったことか」では「他人に危害を与えず、約束を守り、嘘をついたり騙したりせず、子どもや高齢の親の面倒を見て、そして自分の地域社会の貧しい人々に少し寄付でもすれば、十分によいことをしたことになる。(中略)。赤の他人に寄付すること、…は、よいことではあろうが、私たちはそれを自分たちがしなければならないことだとは考えない」という私たちの一般的な直観に対して、医療や食料、住居といった基本的な生活条件が満たせないで亡くなることは悪いことであるという前提から、命が失われるのと「ほぼ同じくらい悪い」ことを犠牲にすることなしに救済のための寄付ができるならば、あなたは寄付すべきだという観点が提示される。この観点に立てば、「余ったお金を、コンサートや流行の靴やおいしい食事やワインや遠い国での休暇のために費やすなら、私たちは間違った行為をしていることになるのだ」。

しかし「私たちのほとんどは『他人に対して慈善をなせ』という呼びかけを無視する」。その理由およびそれに対するシンガーの反論が第3章で示される。道徳的相対主義、自己の収入や財産を自由に使用し得る権利、自ら不正を犯していない相手に寄付すべき責任はないという考え、税金による対外援助、行なわれるべき政治的改革的改革の阻碍、援助への依存、寄付による経済成長への悪影響、身近な者への愛着から赤の他人への寄付は不自然であるといった寄付や援助についてよく取り上げられる論点に、シンガーは説得的な反論を行なっている——寄付文化が未成熟な日本の読者には特にこの章を読んでもらいたい。

第4章「なぜ私たちはもっと寄付をしないのか？」では寄付を妨げる心理として、救済される対象が

「特定可能な被害者」でない場合、救済すべき人数が膨大な場合、他の人でも救済できるとわかった時に生じる「傍観者効果」が作用する場合、また援助が寄付という貨幣を媒介して行なわれること、進化の過程で習得した「身近な人をひいきにする」癖や公平感などが挙げられている。これらにも説得的な反論がなされているが、「他人のニーズが自分のニーズと同じくらい重要であると結論したからといって、それをそのように感じるようになるわけではない」ことが、私たちが目の前にいる人と同じように救いを求めている遠くの人を助けようとしないう問題の核心があるとシンガーは言う。

第5章「寄付する文化を作り出す」では、財産の半分以上を寄付した者が会員となる「50パーセント同盟」などが挙げられている。寄付する文化を作り出す上で重要なのは「寄付を公にすること」である。人は周囲の人々が正しい事（寄付）をしたと知れば、同様の行為をとる傾向があるからだ。「貧しい人々の顔が見えるようにすること」も重要である。またオプトイン（自ら参加する）ではなくオプトアウト（拒否する場合のみ不参加となる）など「ナッジ」を上手に使う事で寄付を増やす方法もある。さらに他人のための寄付行為を自分の利益のために行なったと言う「自己利益追求の規範に挑戦する」必要があるとシンガーは言う。人は自己利益の追求にとどまらない数多くのことをやるにもかかわらず、それを自己利益の追求という物語に回収させがちだからだ。

第6章「一人の命を救うのにいくらかかるか、また寄付先として一番よい慈善団体はどうやって見つけるか」では、一人の命を救うのにかかるコストは200~2,000ドルであり、寄付先として有効な慈善団体は、2007年創設の「ギブ・ウェル (<http://www.givewell.org>)」などで探すことができるという。

第7章「よりよい援助に向けて」では、従来の援助の在り方の批判とこれからの援助の在り方が議論されている。国家による対外援助については「援助費の大半は人道的な考慮ではなく、政治的ないし国防上の優先順位に基づいている」ため、極貧状態にある人々に適切な援助が届けられていない。

援助が製造業や輸出産業の衰退をもたらすという批判に対しては、1990年代以降、各国政府による援助費の賢明な使途により必ずしも衰退をもたらすものではないと言う。一方で問題なのが先進国における農業補助金である。これによって貧困に苦しむ人々の境遇が一層悪化してしまう問題が指摘されている。また紛争終結後の数年間に相当な額の援助が行なわれることで再び紛争状態になることが回避される。地球上にはあまり多くの人々は生存できないという批判に対しては、2007年に畜産のために消費された10億トン近い穀物や大豆を貧困状態にある14億人に分配するならば一人当たり1日に1.3kgほどになる計算で食糧は十分にあること、また貧困の削減や教育（とりわけ女子教育）が出生率を下げるという事実から援助は適切であるとされる。援助の目的は「経済成長それ自体ではなく、…。命を救い、不幸を減らし、人々の基礎的なニーズを満たすことなのだ」。

第8章「自分の子どもと他人の子ども」では、ゴドウィン『政治的正義』以来の難問についてのシンガーの見解が述べられている。人は自分の子を他人の子よりも必ずしも優先すべきではない場合があるが、それは達人倫理でしかなく、一般に受容可能な観点から、自分の子を他人の子よりも優先することを認める必要があると指摘されている。

第9章「多くを求めすぎだろうか？」では、シンガーの理想的な規準、すなわち「これ以上寄付すると子どもの命と同じくらい重要な何かを犠牲することになるというところまで寄付すべきだ」よりも要求が低いミラー、カリティ、フッカーらの見解が検討されるが、彼らも同意する点として「世界中の最も貧しい人々を助けるために、あなたが何も寄付しないか、ほんのわずかしかが寄付しないならば、あなたは間違ったことをしている」ことが指摘されている。現代世界は1時間に千人近くが亡くなり、何

百万人もの女性が治療可能な産科瘻孔を患い、適切な治療で視力が回復する見込みのある何百万人もの人々が失明状態にある「非常事態」だからである。

第10章「現実的なアプローチ」では理想的な寄付の規準ではなく一般に受容可能な規準が示される。全体の上位10%の（凡そ年収が10万ドルを超える）人々は、豊かさに応じて所得の5%から最大33.33%を寄付すべきであり、それ以外の人々はできれば5%だが、可能な範囲で寄付すべきであるという（シンガーは平均して1%と見積もっている）——全世界でこの規準に基づいた寄付が行なわれれば、年間1兆5千億ドルが開発援助資金になり、この額は国連のミレニアム開発目標を達成するのに必要な額の8倍に相当するという。

以上、本書は世界の貧困を確実に無くすために必要な「有効な寄付」と、そのような寄付を人々に促す「有効な寄付への誘い」の提示という「有効な利他主義」、「思慮深く美しく正しく生きることで快く生きられる」実践の企図である。

このシンガーの自発的な所得の移転の主張は本当に有効なものだろうか。金融取引税や連帯税・資産課税などによる救済方法の方が持続可能なのではないだろうか。またD.ミラーのように、そもそも貧困を生み出した歴史的な経緯や世界経済の構造的暴力をこそ問題にしなければならないのではないだろうか。

しかし課税のあり方を検討している間にも毎日千人近くの人々が亡くなるという「非常事態」に対して倫理的に有効な方法とは多くの人が無理をせずに行な可能な自発的な所得の移転であるという考えにはやはり説得力があるように思われる。

しかも寄付は当人の幸福によい影響を与えるという。昨今、公共心や道徳心の衰退が叫ばれ、反動的な政治や教育が行なわれようとしている日本で、社会の絆や公共心の育成には、シンガーが推奨する寄付文化の育成が適切な手段になるのではないだろうか。寄付行為によって公共の事柄に関心を持ち、どのような対策が有効かを考える機会になる。自発的な所得の移転は当人の生き甲斐になると同時に他者への寛容や配慮が育まれる源にもなるのである。

むろん自発的な所得の移転による貧困救済というシンガーの提案は万能薬ではない。彼も言うように、現実には複雑で一筋縄ではいかない。P.コリアー『最底辺の十億人』で指摘されている、紛争や天然資源、内陸国という地政学的条件、統治の失敗という罫のいずれかに陥った地域へ援助を行なうことは容易ではない。そもそもそのような地域の情報が十分に得られないということもある。シンガーの提案を含めて、今まさに死に瀕した人々を救済しようとするあらゆる試みは容易ならざる問題に直面し続けている。この現代世界の喫緊の解決課題に対して如何に応答すべきか。「シンガー事件」のように功利主義的な根拠を疑問視する見解もあるが、シンガーの提案を退けるとすれば、どのような選択肢がより有効なのか。グローバルな世界に生きる人間の倫理的態度決定として不可避の問題であろう。

ともあれ「誰であろうと基本的には、自分の人生が単に商品消費してゴミを出す以上のものだったと思いたいものです。誰だって、人生を振り返って、皆が住みやすい世界を作るためにできる限りのことをやったと言いたいものです。…。何であれ自分にできる限りのことをして、苦痛や苦しみを減らすこと——これ以上に強力な動機があるでしょうか」。本書末尾に引用されているこの言葉に共感したら、ぜひ本書を紐解いてほしい。

（いたい・ひろあき／東京交通短期大学准教授、IGS研究支援推進員）